
恋物語

一ノ瀬亞咲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋物語

【Zコード】

N5144BA

【作者名】

一ノ瀬亜咲

【あらすじ】

「だから嫌いなんだ……男子高校生は

女子大学生・高屋美咲

「女全般、興味ないから」

男子高校生・御崎ルイ

互いに2度と会うつもりのなかつた2人。
しかし意図せず繋がりが出来始め……

「お前、女嫌いはどこ行った？」

ふわふわ甘い恋物語。

0・プロローグ

【0・プロローグ】

私は男子高校生がきらいだ。

つい2・3年前まで授業や行事では頼り頼られ、人生の所謂青春時代をともに渡ってきた存在なのに。

ハイ出た年寄り発言　なんて今じゃお決まりの言葉を自らに浴びせ、1人苦笑する。

人間関係トラブルの80%は思い込みや勘違いが原因らしい。

例えば、背後にいる3人の男子高校生が私の耳元でグラグラ笑っていたとしても、彼等のなかの誰かが長年の片想いを実らせたことへの祝福ゆえかもしないし、

傘を振り回した拳銃私の肩にぶつかったとしても、部活の雨天中止のせいで体力が有り余っていたからかもしないし、

「おいカズ、お前オネーサンに巻当たつたぞー」
「うつわー最悪、マジ早く土下座しろって!!」

……いつもヒトを勝手にネタにするのだって、話題が無くなりかけていた彼等のやむを得ない流れなのかも知れないのだ。

こんな日々見受けられる下らないと言えばその通りの出来事の積み重ね。

これを原因に不特定多数の“男子高校生”という存在を丸ごと嫌悪の対象にするなんて、彼等からしてみれば理不尽の極み。

そんなことは分かつてゐる。でも。

「へ……あ、当たりましたか？大丈夫ですよ、ありがとうございます」といいます

いや当たりましたけどね。

熟睡しても飛び起きるくらいの勢いでしたけども。
敢えての気付かなかつた振り、加えて予想に反した感謝の言葉と
適度に浮かべた笑顔。

一瞬ポカンと固まる。

しばらくして気まずさ半分恥じらい半分のよく分からぬ表情の
まま、軽く会釈をしつつ顔を逸らす。

彼等のお決まりの反応だ。

煩わしい。

返事する度胸もない奴がヒトをしじつもない話題の種にするな。

作り笑顔に頬を染めるなガキンちよが。

1・初見

【1・初見】

「今日のご飯は……あ、ママ休みか。じゃあよひしくつと
パチンシと携帯を閉じると、そのままバスの窓に目を向ける。
いつも見慣れた景色。

日が落ちたこの街は大学がある都心部と違つて建物もさほど多く
ないし、街灯もやたらと設置されていない。

今日も星がきれいだ。

バスター・ミナル近くのファミレスでいつもどおり21時までのア
ルバイトを済ませると、息をつく間もなくバスに乗り込んだ私はグ
グッと腕を伸ばした。

右も左もわからなかつた大学生活も1年が過ぎ、1番樂ちんな大
学2年生……か。

はじめは自分で1週間の時間割を作ること自体訳が分からな
くて、別世界に入つてしまつた感覚だった。私服を毎日選ぶことも、
自分でお金稼ぐことも、
だからなのかな。

高校の頃の自分達はもう大人だなんて態度が 酷く滑稽に見え
てしまうのは。

重く感じてきた目蓋に素直に従い、うつらうつらしながらバスの
心地よい揺れに身を任せる。

高校は自転車通学だったために慣れなかつたこの振動も、いまや
浅い睡眠を促す導入剤になつていてるから不思議だ。

人間なんでも慣れつてことなんだろつた。
今自分が芯にしている、信念さえも。

「あーもう着いちゃつた。なんか今日はやけに早くねッスか?」

決して広くはないバス内に、その声は響いた。

「そりや今日乗つた停留所が学園前だつたからだろ。お前はとつと
と降りろ大型犬」

「陽輔！ 陽輔冷たい！！ ゲンちゃん……陽輔やっぱ怒つてるよ
お～」

「ははは。そりやあ試合中に熱烈キッスをかまされちゃーなあ
「あれば事故じゃんかあ！！ わざとじゃないしーちゃんと謝つた
しーみんなにも説明したでしょーー!?」

「うぜえ。声でけえ。いいから消える。そして1週間俺の半径30
メートル以内に入るな潰すぞ」

「う……そんな刺々しい君にフォーリンラブ」

「陽輔もシャイなんだから～あ、じゃあなルイ！ 明日も寝坊すん
なよー」

「くたばれ。2人ともくたばれ」

.....

なんだ、アレは。

襲つてきていた眠りを一掃して 正確には邪魔してくれたのは、
元気が有り余つた様子の男子高校生3名の会話。なんて目覚めの悪

い。

最後尾の窓際に座っていた私は、彼らが気付かないことを前提にじとつと嫌な視線を送る。

五月蠅い。降りるならとつと降りろガキ。

こつちは1秒でも早く家に帰つてレポート印刷しなくちゃいけないんだよゴルア。

私は、どでかいエナメルバッグを抱えてバタバタと車内を駆けていくその1人になんとなく視線を馳せていた……が。

突然、運転手さんに定期券を見せていたその少年がこちらにグツと顔を向けてきたことに、私は肩を小さく揺らした。

はー…危ない危ない。

思いつ切りガンつけてる表情を見られるとこだつたよ、私。

まあ当然、少年も私に視線を向けた訳じゃない。

先ほどまで小規模な漫才を繰り広げていた2人に「そんじやお疲れっしたー！」と別れの挨拶を交わしただけなのだが。

癖のついた茶髪に長身。着崩した制服、愛想のいい振る舞い。ああ、さぞおモテになるんでしょうね。

それが、大型犬と呼ばれた彼の第一印象だった。

2・遺失

【2・遺失】

今日ほど自分のこの性分を恨んだことはない。

バイトもなく授業が午前のみ。なんて素敵な水曜日になるはずが。

現在地、本日も「利用ありがとうございますバスター・ミナル。手元には先ほど定期券売り場のお姉さんから聞いた、遺失物管理課までの道が書かれたメモ紙。

「ここから2つ皿の角を左……はあ……」

レポートも無事受け取つてもらえて 担当の教授は提出時に3割の生徒にやり直しを命じるのだ いつもならスキップを踏んじやうほど麗うかな気分で、12時50分のバスに乗り込むはずだつていうのに。

何でこんな地下通路をつらつらこっているのかと言つて、原因は……そう。

「あの大型犬のせいだわ、ホント」

……あれ？

キラッと小さく光つたものに、私は視線を向ける。
見間違いかと思ったそれは確かにそこにあるようだ。

周りに不振がられない程度に身体を動かしてみると、先ほどと同じように光の反射がこちらに届いた。

あの席……確かにさつきの男子高校生が座つてたとこ？ 何か落ちてる？ 忘れ物か。
まさか家の鍵とか

そんな考えが浮かんだ途端、そわそわしながら視線を右往左往させる。

先の少年が降りた後、いまだバスに乗つている2人の友人らしき背中に私は密かに念を送つた。

おーい、くつちゃべつでないでどうちか気付け。君たちのオトモダチが何か落としてつてるよー。

「おーい陽輔、お前もいつまでも膨れてんなよ？ アイツもわざとじやねーしさ、今回は」

「や、別に気にしてないッスよ。アイツがうざいから乗つかつただけッス」

「あ、やっぱ？ アイツ生糞のいじられ役だしなーあ、そろそろ降りるぞ！」

「うッス」

……届かなかつたらしい。

ただの1度も問題の席に視線を移さないまま、2人の少年たちは私の降りる1個手前の停留所で颯爽とバスを降りていった。

ピチピチの女子大生からの熱い視線に気付かないたあどついうふ見だこのやうー。

停車ボタンを押した私は、重い腰を上げる。信号に引っかかったバス内を移動しながら、足を止めたのは勿論……大型犬の跡地。

「ピアス?」

てつくり家鍵とばかり思つていたその落し物は、少し大きめの黒いピアスの片割れだつた。

少し拍子抜けしつつもヒヨイツと摘み上げたそれは、止め具もまだ開いていないようで。もしかして買つたばかりで落としちやつたとか?

お気の毒になー……とりあえず運転手さんに渡しておくか。

『大曲ですよ~。お降りの方いらっしゃいませんかー?』

「つあ、お、降ります降りますっ!…」

いつの間にか到着していた停留所のアナウンスに、肩をびくつかせながら叫ぶようにそう告げると、焦りながら定期券を提示する。発進するバスを見送ると、私は星空を仰いで大きなため息をついた。

「つーまだちらほら乗つてる人いたのに。あんな大声出すんじゃなかつたよもぉ……」

身長154センチ、童顔、見た目高校生（もしくは中学生）。せめて振る舞いは、とは思つているのだけれど。

振りでも狙つてゐる訳でもなく、なんだかんだで周りから頼られる姉御キャラではなく頼る妹キャラに位置づけられている私の社会的ポジション。

これでも長女なんですけどね。驚かれるのも慣れたつていうかね。

「あ。」

自嘲気味に笑みを浮かべながら歩を進め出した私が感じたのは、置いてくるのを忘れてしまった……左手の中の感触。

「ううそでしょお？ もお～…………」

回想終了。

ようするに、あのモテ男くん（仮）の落し物を運転手さんに渡しそびれた私は、翌日である今日、バスター・ミナルの管理課に遺失物として提出しようとしているわけだ。

放つとけばいいのに家鍵ならまだしもピアスの、しかも片割れ。あちらさんがここに取りに来るのかも怪しいもんだし、もう片割れもどこかに落つことしている可能性だってある。

そしたら片割れだけ戻ってきてあまり意味もないだろうし。ブツブツそんなことを呴きながらもその足を止めれないのは、元来備わった生真面目な性格ゆえ。
損だよねーこのオプション。

『アンタも本当律儀だねー。どうせその少年だつてピアスを落としたことにすら気が付いてないでしょーよ、きっと』

2限目が終わると同時に一緒に鬼教授にレポートを提出に行つた親友の言葉を思い出し、その足取りをさらに重くさせる。器用貧乏な私の性格を知ってくれている有難い友人の一人。加えて自由人。その割りに言つてる事は不思議と説得力が含まれる、うらやましいお姉さま。

出来ることならね。香織みたく要領よく生きたいって、私もさあ

……

「だから、ピアスです黒の…！届いてないんスカツ？」

わーお。

目の前の光景に私の足がぴたりと止まる。

私が知る限りじゃ初めてお姉サマの合理的な読みが外れる口が訪
れたらしい。

窓口のおじさんに食つて掛かるようなその少年は、言動から察す
るに昨日見た彼に間違いないだろ。

外見はぼんやりだけど、茶髪っぽかったのは覚えてる。

香織～彼の少年は殊勝にもピアスを取りに来ていましたよフハハ
ハ。

頭の中でいつも呆れ顔を向けてくる誰かサンに二ンマリ笑顔を向
けると、小さく深呼吸をしてその胸中に近づいた。

まあ男子高校生は嫌いな私だけじね。こちらに危害がないなら問
題ない訳で。

集団じゃなく単品ならそんなに嫌悪もしないのだ。

「え、と。あの～……失礼ですが…」

「……は？俺？」

「こちらに顔を向けてくる少年の態度に、一瞬怯んでしまつ。
あれ、思いの外愛想が悪い？」

昨日のバスでの会話では、むしろ誰にでも無条件に壊こちやう性格だと思ってたんだけど。

他人にはそうでもないのかな。

ちゅーか、この子身長たつかいなあ……って、そつじゃなくて。うん。これは早いところ肝心のピアスを渡してしまおう。

そう思い立った私は、とつとと自分のかばんの中を漁り、通の封筒を取り出した。

ピアスをかばんの中で見失わない様に、前もって小わめの封筒に入れておいたのだ。

それを手にした私は、再び顔を上げ田の前の少年に視線を合わせた……が。

ギクッ！！

次の瞬間、視界に飛び込んできたものは、思わず息を呑んでしまつ程に……嫌悪に満ち溢れた表情。

「……あ、の
「何、コレ?
「ツ！」

その眼差しは私を畏縮させるには十分過ぎて。差し出しかけた封筒が、小さく揺れた。

「悪いけど俺
「え……つ」

女全般、興味ないから。

なんてこつたい。

つい一瞬前まで恐れおののいていた目の前の男が、この一言でた
だのマヌケに見える。

こんな楽しいことがあつていいのかな。ひょっとして生真面目な
働きアリの私に対する小さな報酬？ 神様。

失笑状態でフリーズする私から視線を外すと、窓口の人になにや
ら連絡先などを書いた紙を渡した彼は私の存在をスルーして横脇を
通り過ぎていこうとする。

このまま封筒の中のピアスをドブ川に捨ててもいい。
そのくらいしてもバチは当たらないだろう、この場合。
……でも、ね？

「黒いピアス」

遠ざかる背中が、その動きを止める。

勝手に失恋した女にされても胸くそ悪いし……何より。

「“コレ”。貴方の落し物じゃないですか？」

「あ。」

あ。じゃねーよ。

それでも、あんまり情けない表情に切り替わるものだから、ドブ川にしなくて良かったかな、なんて思う私がいた。

私もそこまでお人よしじゃないからね。結構本気だつたんだけど。

そんな考えは喉元に留めたまま、封筒の中から手のひらに転がりだした問題のピアス。

それを目にした彼は、ものすごいスピードでひきしりに駆け寄ってきて。

ああ、確かに大型犬。

「昨日帰りのバスに私も乗つてたの。まさか直接渡せるなんて思つてなかつたけど……タイミング良かつたね」

「そ……ッスか。えっと……その」

さつきまでの態度とは打つて変わつて頬を僅かに赤らめてオロオロした様子に、思わず小さく笑みが零れる。

昨日の第一印象は外れたな。

少なくとも見知らぬ女に対しては、相当冷たく接しているみたいだ。今どき希少価値高い子だなあ。

まあ個人的にその方が好感度高いけどね。軽い男は嫌いだ。

「え、と。わざわざ拾つてくれて、ありがとうございまス……」「どういたしまして。ごめんね？ 紛らわしく封筒なんかに入れてきちゃって」

「ツ、え！？」

「キミ、モテるでしょ。勘違いしてもしょうがないよね~うん。それじゃあこれで」

不意に昨夜の会話が思い出される。

『アイツ生糞のいじられ役だしな〜』右に同じ。ついつい突付いてやりたくなってしまつて。

少し意地の悪い言葉を残した後、真っ赤になつた彼を見届けて私はその場を後にした。

3・月経

【3・月経】

「美咲！ 今日の吉倉の国際法やつぱ休講だつてさ～」

「あーマジですか。あの先生休講なさでしょ。補講期間が恐ろしいわ……」

「ホントにねー。あ、先に食堂行く？」

春の柔らかな日差しに田を細める。

1年前に入学を果たしたこの大学キャンパスには再び桜があちらこちらで満開を迎える。私たちは手慣れたようにそこで勉学に励む。学生じゃなくても散策できる構内には犬を散歩させているおじいちゃんや、修学旅行生の団体さん、クラーク像の前で記念撮影をしている外国からの人もいて。

平和だな～うん。

「へえ～それじゃ、結局ピアスは直接持ち主の男子に渡せたんだ？」

田の前の醤油ラーメンを駆りながら香織が口にするのは、昨日のピアスの話。

「うん。ジャストタイミングであつちも管理課に来ててねー結構大切なピアスだつたっぽい」

「そんで、少年はピアス入れた封筒をラブレターと間違えた、と
「ははっ、あん時の少年つてばワタワタ焦っちゃって可愛かったよ

」

「美咲も紛らわしいつちやそうだけどーさすがに恥ずかしいよねえ、
その勘違い！」

「私も見たかつた～！」そう言つて噴出す香織に、私もつい思い出し笑いをしてしまった……とは言つても、ほんやりとしか覚えてないんだけど。

お昼時になり少しずつ混み始めてきた食堂。休講も悪いことばかりじゃないかなーなんて思いながらざるそばを啜つている私に、香織はその言葉を続けた。

「そんで？ その少年とはそれつきり？」

「はふ？ そりゃーそれつきりですよ……っていうか、それ以外に何がある？」

「アンタ確か男子高校生を毛嫌いしてなかつた？ なのにわざわざピアス1個のためにうろつきまわつた訳でしょー」

「もしかして、その少年が案外好みだつたんじゃないかつて思つてさ」そう告げる香織の顔は楽しそうにニヤついている。

もともと恋愛トークは私のほうが食いつきがいい方なのだが、最近彼氏と別れた香織としては友人の浮いた話でも興味がうずく頃合いなのだろう。

「違う違う！ 別に私は男子高校生そのものが嫌いなんじゃないよ。男子高校生の“集団”が嫌いなの！」

「いやだからわあーそれつて何が違うわけ？ 五月蠅いのが嫌だつてこと？」

「ふ……まあね？ 見た目仕草とともに大人っぽい香織には分からない話ですけどねえ～」

「老けてるつて言いたいのかい美咲ちゃん？」
「違います。羨ましいんです！」

そう。もし仮に私が香織のように年相応の外見をしていたら、

「この嫌悪感も少しは緩和されていったことだろう。

1年前。大学1年生でそわそわしながらバスに乗り込んでいた春。男子高校生2人に「もしかして南高校の新入生?」と話しかけられたのを皮切りに。

この1年でどうにも大学生とは認知されないまま、時には馬鹿にするような反応をされることが度々あって。

「……しまいには、中学生3人組に可愛いかどうか品定めされる始末だよ」

「ぶふっ!! 何それ、ピカピカの中坊に『おい、あの子可愛いね?』みたいな!??」

「それで止まるならまだいいけどね。『いや、そうでもなくね?』なんてほざきやがった日にやーバスの窓から放り出したくなるつていうかね」

「ははっ、やっぱ、ラーメン喉から飛び出る感じだつた!!」

ヒトの切実な悩み相談に腹を抱えてギヤハギヤハ笑つてくださる親友。

その姿に、私は静かに友人の器に箸を伸ばすと、大きなチャーシューを摘まみ上げ自分の口の中にポイッと放り込んだ。

すぐさま断末魔のような悲鳴が聞こえるもシカトシカト。

人の話は真剣に聞いてやらないとねーうん。

「ま、要するにさ。見ず知らずの奴らに話のネタにされるのが嫌なわけ。でもってーそれって大人な女性は絶対にターゲットにならないでしょ? O-Lさんとか美人さんとか」

「あー私みたいな?」

「結論、私のようなこじんまりしたチビ女が必然的に話のターゲットにされやすいわけですよ。アンダースタン?」

「華麗なるスルーをサンキュー・ミサキ、イエ」

バス内は密室。その中で繰り広げられる私自身の話題。

自意識過剰なのかとも思つたけれど確信を待たざるを得ないことが何度もあつて。

たとえほめ言葉でも居心地悪いことに変わりない。どうして無闇にこちらをネタにしてくるのか。

穏やかな時間であるはずの帰りのバスがその出来事で一気に息苦しくなるなんて、きっと奴らは気付いていないんだろう。

だから嫌いなんだ……男子高校生は。

* * *

私がいつも使用しているバスター・ミナルは、地下から大きなデパートに直結している。

経済利益を考慮すれば子供でもその合理性が明らかなその設計。今の今まで、私も夜ご飯の買い物などに使わせていただき感謝していたなんだけれど。

今は別のが隣接していてほしかったと嘆きながら一人、1階トイレの洗面台の前にうずくまつっていた。

こういうときに限つて人1人入つてこないから嫌になる。

いつもなら女子高生が化粧直しに占拠してたり、おばあちゃんたちが世間話を続けながら大量に入つてくるというのに。そんなに私が嫌いかちくしょー。

卑屈になりながらも唸り声を上げつつ、座り込んでお腹を抱える原因。

紛れもなくそれは

「生理の予定期……チェックしどくの忘れてたぜ……」

フフツと自分でも氣味が悪いと自覚できる薄笑いを零すと、横に広げたままのかばんを再び漁つてみる……が。化粧ポーチの中にもかばん奥のポケットの中にも、求めている存在は見当たらない。

どうしよう。どうしよう。

死活問題だ。

「まあ……ナップキンが奇跡的に入つていただけ、まだ運はある……か?」

初日にナイアガラの滝のような出血を催す私の月のものにナップキンまでないとなれば、一生トイレから出られない。そう考えれば最悪の事態は免れて……いや。

「どのみち生理痛で動けないんじや、大して変わんないよ……」

そう。私が今必死になつて探しているものは、生理の日には欠かせない必須グッズその2。つまり鎮痛剤なのだ。

いつもは生理じゃなくても常備薬としてかばんのポケットにEVEが入つていていたが、如何せんいつも入つてている氣でいるため補充することを怠ることもしばしば。

……そのツケが現在進行形で私に襲い掛かっているわけだ。

毎月毎月こんなに酷くはないのだが、半年に1回くらいのクールで身動きを取れない程の痛みが走る私の身体。

しかしながらいつもは決まって家にいるときにそういう状況に見舞われていたため、誰かしら薬を持ってくれていたし薬さえあれば10分程度で復活してきたのに。

「薬局は、地下一階に行けばすぐそこ……だよね」

「まずい。これ以上ここに留まるのは、まずい。」

これまでの経験上、時間が経てば経つほど症状は悪くなるし、貧血で全身に力が入らなくなつたら本当に動けなくなつてしまつ。

それだけは、どうにかして避けなくては

意を決して洗面台のふちに手をかけ、無理矢理身体を起こしにかかる。

生理痛つてお腹をくの字に曲げたくなる痛みだから余計質が悪いんだよな。くつそーいうことを、本当男子が羨ましくなるわ……

半分痛みから意識を逸らすために、そんなことを頭の中で呟きながらトイレからの脱出を試みる。

ああ、もう。この時点で既に限界点ギリギリだ。

薬局はエスカレーターで下がつてすぐ右に曲がれば、デパートの入り口付近、花屋の向かいにある。

気張つて、エスカレーターにさえ乗つかれば

「　い、つ……ッ」

ガタツと少し音を立てると、私はトイレ出口の田の前に設置された自動販売機の横に再び座り込む。

お腹の痛みに、耐え切れなくなつてきた。

我慢しそぎて全身にブワツと冷や汗が滲むのが分かり、私の頭の中ひつきりなしに警告音が聞こえてくる。これは……貧血の最悪ステージの合図だ。

一瞬前まで身体の中にあつたはずの水分が、冷や汗になつて一気に外部に出て行つてしまつ。酷い耳鳴りが遠くから鳴り響いてきてきた。

脱水症状。

口の中がカラッカラに乾き切る。冷や汗が身体を動かすのに必要な体温を遠慮なしに奪つていって、これは、ちょっと……あれ。むり、だよこれ。むり。むり。

だれか

「あ、あのー……大丈夫？ どつか具合悪いんですか……？」

遠くから微かに届いたその呼びかけに、私は何とかその視線を上げる。

おとこのー。
今、私に話しかけてるよね？

それだけ辛うじて認識すると、おそらく心配そうに私のすぐ傍にしゃがんでくれたその影に、私はようよると力の入らない手を伸ばした。

弱々しくも私に手首をつかまれ、少しばかりビックリしたような様子だつたけど……ごめん。今はこれで一杯一杯なんだよ私。許して。

「すみませ……貧血で、動けなくて。あの、お願ひ、聞いてくれますか……？」

「へつ！？ あ、いいですよー！ 僕に出来ることなら……」

「デパート入つてすぐそこの薬局で……EVEって鎮痛剤と飲料水を買ってください……ッ！ サイフ預けますんでー！ 出来れば出来る限り早く……お詫びはさせて頂きますから……どつか……」

私は尻すぼみにならつともひと息でそう告げると、かばんからお

もむろにサイフを取り出し、彼の手のひらに置いた。

いきなり渡された他人のサイフに、目の前の男子は「え、え？」と戸惑っていたが、私が無理矢理笑顔を貼り付けて頭を小さく下げる、ハツと思い立つたようにその場に立ち上がった。

「わ、わかりました！… えっと“イブ”？ っていう薬と飲料水 ツスね！！ 即行で買つて来ますんで…！」

「ゲンさん？ んなどこで何してんの。俺ベンチで待つてるって … つて、誰ツスかその女」

「ああ、ルイ…！ お前さ、この人の様子見ててやつて。俺ひとつ走り薬局行ってくるから…！」

「はあ？ つて、ちょ、ゲンさんツ…！」

ん……何だか、人数増えた？

瞳を硬く閉ざしてしまつた私は、これ以上手放したくない体力と水分を必死に繋ぎとめようとしている。

ああもう。手が、顔が、身体が冷たい。

しばらくすると身体全体がカタカタ震え出してきて。脱水症状になるときのお決まりの症状なんだけど… やっぱり慣れない。怖い。

「ちょ… 真っ青じやんアンタ。救急車呼んだほうが あれ？」

「つ

既に声を出すことも無理になつていた私は、薄れ行く意識のなか必死にブンブンと首を横に振つた。

生理痛で救急車とか… さすがに笑えないし。

薬を頼んだ少年の帰りを待つてゐる様子だったもう一人の少年も、さすがに座り込んだままの私を放つて置けなくなつたのかその場に

しゃがみこんだ。

「ひすらと皿蓋を開くと、近くに感じる人の気配にすがるよう私は震える手を伸ばす。誰かにしがみ付いていたくて。

無意識のうちに指を掠めたワイヤーシャツの端をキュッと掴んだ私は、そのまま、意識を失った。

「本当に、ほんとうに……！ 感謝してもし切れません！！ ありがとうございました……！」

その後、案の定いつもの薬を手に入れた私は数分前の青白い顔がウソの様に元気を取り戻した。

目を見張るような回復の早さに少年2人はポカンと立ち尽くしていたが、私が深々と頭を下げると少年の片割れが焦つたように口を開いた。

「いやいや、困ったときはお互い様ッスから！ あんな状態の女性を見つけて素通りなんて男が廃りますしねッ！」

「俺たちが通り掛らなかつたらどうするつもりだつたんスか……常備するから常備薬つてゆーんでしょお？」

「ル～イ！！ 病人に向かつてなんてことを……」

いや、病人ではないけどね。

さつきから元気のいい黒い短髪の男の子と、呆れ顔でこちらを見遣る茶髪の癖つ毛の男の子。

紺色のブレザーにストライプのはいったネクタイ。制服を見れば

一目瞭然、2人とも第一高校の生徒さんだ。

お昼時にこれでもかつてくらい、男子高校生への不満を吐き出してきたのにこの展開……少し肩身が狭い。本当にすみません。2人とも。

「や～コイツ極度の女嫌いなんスよ。野郎には懷つこい癖に、女には愛想悪いのなんのつて……」

「あつ、全然気にしてないですよ！ 言つてくれていふことは正論ですし……」

「つて、ゲンさん！ 今日はまだフツーでしょお！？ いつもなら俺から話し掛けることだつて100%ないんだからね！！」

「ん？ ああ。そう言われりやーそつか？」

「はは、それならますますお礼言わなくちゃだね。2人とも本当にありがとうございます！」

なるほど～確かに男友達に対する態度と私に対するそれに多少違和感あるもんね。女嫌いかあ、納得納得。

まあ必要以上に馴れ馴れしい男より全然いいけどね。軽い男は嫌いあれ？

「この考え方だか。

……デジャビュ。

「キミ、あ、茶髪の子ね。もしかして……昨日のピアスの子？」

「……気付いてなかつたんスかあ……」

呆れ顔がさらに色濃くなると、目の前の彼は肩を落としてヘターッとその場に座り込んだ。

その姿に私は慌てて何度も謝罪の言葉を掛ける。

私つてば人を覚えるの苦手で。

それがなくても制服だらけの高校生の顔なんて区別付かないって
いうか……いや、これは言いませんけどね。

それと同時に、引っ掛けっていた疑問に合点がいった。
そつか。昨日のピアスのことがあるから、女の私にも待遇を良く
してくれてるのか。

昨日話し掛けた時なんか蛇に睨まれたカエル状態だったもんね、
私。

「え、なになに？ 2人知り合い！？」と騒ぐ隣の彼に、私は苦笑
を浮かべながら落し物のピアスのことを簡単に説明した。

「あ～！ そういうやルイ、昨日午後からの授業全部ブツチしてどっ
か行つてたらしいもんなあ。あのピアス探してたのかよ？」

「まあ昼過ぎには手元に戻つたけどね。残りの部活までの時間は屋
上で日光浴してました～」

「アホかお前ッ！ そんなら俺も呼べよ！」

「……ツッふふ

「！」

趣向がどんどんずれて行く2人の会話に、私はこらえ切れずに小
さく噴出す。

この2人つてばすつじぐる元気で、まるで公園でじゅれ合つワソニち
ゃんみたいだ。

「ほーらー、笑われてんぞお前」

「俺え！？ ゲンさんだつて同等評価でしょこの場合つー」

「ふふつ、いや、今日は本当にお世話になりました。私、M大の高
屋美咲つていいます。えつと、ルイ君とゲン……君？」

やり取りのなかで勝手に頭に書き留めておいた2人の呼び名を、

多少自信なさ気に呼んでみると、『ゲンさん』と呼ばれていた子はニカツと笑つて見せた。

「すつげーM大！！ つかやつぱし俺らより年上だつたんスね！」

第一高3年の源大樹です。苗字が源氏物語の“源”だから後輩から

“ゲンさん”って呼ばれてんスよ

「あ～なるほど！ 大樹君ね」

……つていうか、大樹君。私年上だつて分かつてくれてたんだ！ なんて素敵な子！！ 真つ先にうずくまつてる私に話しかけてくれたのも君だしね！！

密かに感動している私をよそに、「ほら、お前も自己紹介！」と促されたのはもう一人のワンちゃん。

クルツと視線を移すと、若干言い淀んでいる様子の彼の姿。

昨日の恩を感じているからか、なるべく嫌悪感を出さないようにしてくれているんだろう。本当は女の子と話すのだつて気が進まないはずだ。

でも女嫌いなのは個人の自由だし。

私だつて 彼の愛想を買つために、ピアスを届けたんじゃないよ。

「……後輩からのあだ名つてことは、ルイ君は1年生か2年生？」

沈黙を埋めるように、当たり障りない言葉でさりげなく先を促す。ピクツと少し反応を見せた彼は、逸らし気味だつたその視線をようやく私に向けてくれて。

あ、少し、嬉しいかも。

「は、はい。第一高2年の御崎……ルイです」

「へ？ ミサキ？」

私の名前“タカヤ ミサキ”
彼の名前“ミサキ ルイ”

「ああ～そういうやルイの苗字も“ミサキ”だつたっけな～」
「可愛い後輩の苗字を忘れるつてどうじうことシスか、ゲンさんつ
！」

「へえ～じゃあもし将来私とルイ君が結婚したら、私“ミサキ ミ
サキ”になっちゃうね～」

「なつ！？」

私の何気ない一言に、ルイ君は予想以上につるたえ始めて。
うわ～。また加虐心をそそられるよ、その反応。

「ぶはははっ！！ それウケる！！ つーかルイの名前が“タカヤ
”だつたら婿養子でも“タカヤ タカヤ”になりますよねー？」
「ちょっとお！ 勝手に人の名前を変えないでつ！」
「ははっ、ホントだ。どこぞのお笑いコンビみたいだねえ～」
「あ もうっ！ いいつ加減にしてよお2人ともツ！！」

真っ赤な顔で制止するルイ君の様子に、私と大樹君は性慾りもな
くまた笑って。

天真爛漫でノリのいい大樹君。
懐っこいけど女嫌いなルイ君。

良きも悪きも自由奔放な彼らの姿に、
私は久しぶりに、制服を身にまとっていた頃が恋しく感じた。

4・会心

【4・会心】

「あつれ。美咲じやん」

「あ、ミッケだ！」

地下鉄改札をすぐ出たところで壁に寄り掛かっていると、不意に話しかけられたのは大学の男友達。

本名は田口健一。ちなみに“ミッケ”というあだ名は、第一印象が猫っぽかった彼に私がフイーリングで付けたものだつたりする。うん、ごめんね。

ミッケの背後から覗き込んでくる連れの人2・3人に軽く会釈をする。

ミッケは私と同じ法学部だけど、この人たちはたぶん他学部だから私のこと見たこともないんだろうな。好奇の視線が少し痛い。

「え、ダレダレ田口の知り合い？」

「つーかミッケって誰だよ！」

「あーハイハイ俺のクラスメート！ お前らがつつき過ぎなんだよ

……あ、美咲は誰かと待ち合わせ？」

「そー。ちょっと先週お世話になつた子たちとね～ミッケたちはバ
ンド？」「

皆がそれぞれに背負つている楽器を見て、私はそう問いかける。
そういうえば、ミッケはフォークソング部だったもんね。

「そ！ 新入生も入ってきて新歓ライブもそろそろあるからや、ミ
ニスタジオで練習

「なーるほど。それじゃ格好良いところを披露して年下の彼女でもゲットしていくださいな！」

「もちろんそのつもり～！ ははっ、そんじゃーねえ」

「うん！ ばいばい！」

軽く手を振つて見送ると「バイバーイ美咲ちゃん」と悪乗りするミシケの仲間たち。

もしかして工学部の人たちかな？ あの学部は女の子ほとんどいないから出会いが全然ないんだよねえ……

出会いの場といえばバイト先かサークル内。

大学1年の春なんかは、皆浮き足立つていたからかカップルが乱立してたけれど。

私はその頃、ママが過労で倒れちゃつて色々立て込んでたから、そういう気分じゃなかつたんだよな。

まあそれがなくともフリーのままだつたでしちゃけどね。ふは。私が小学生の頃にパパが病死して以来、ママはずつと私や弟の為に頑張つてくれてたから。

早く 私が支える側にならなくちゃ。

「……何スか今の人だかり。ナンパ？」

「うつおあ～！ なつ、えつ、あ！ ルイ君～！」

「び……びつくりしたあ……驚き過ぎッスよ～～！」

知らないうちに私の目の前に立つていたルイ君の問い掛けに、私は反射的に大声を上げてしまつて。

奇声にも似たその叫びにルイ君も胸を押さえながら非難してきた。ハイゴもつとも。

「はは、『めん』めん。突然でびつくりしちゃつて

「「」ちがひつくりッスよー……、あ、ゲンさんはもう一本あの地下鉄らしいッス」

「あ、了解了解！ この時間帯は7分に1本出てるからすぐだね～」

「……」

あれ。何だろ？」の沈黙は。

私と同じように壁にもたれ掛かつたルイ君との距離も、心なしか人一人分離れているように……見えなくもない。

やつぱり女嫌いは健在、か。

まあ先週助けてもらつて1週間ぶりだし、話し掛けてくれるだけでもルイ君にしては相当珍しいらしいし。

本当はもう少し打ち解けてほしいとも思つけど……それは欲張りすぎだね。うん。

「……ルイ君って身長高いよねー。180？あるんじゃない？」

「え？ あ、ハイ。確かに身体測定で181？だつたような……」

「うつわ～じやあ私と27？差！ そんなにタッパがあるなら部活とか何かしてたりする？」

「俺バスケ部ッスよ。そんでゲンさんと陽輔……あ、前バスで一緒だつた奴もバスケ部で。だからよくつるんでるんスよー」

あ、少し、笑ってくれた。

ようやく見せてくれた柔らかい笑顔に、私もつられて口元を緩める。

よっぽどバスケが好きなのかな。それともその友達が大好きなのかな？

どっちにしても、彼らのこの間のバスの中ではしゃぎつぶりを思い起こすと、仲が良いことは確かなんだろう。

バスケか～いいねえ。青春だなあ……

「え、と……つあのー!」

「うん?」

「その……前の、ピアスのことなんスけど

予想外の話題。

首を傾げながら隣の彼に視線を向けると、こちらを見つめる大きな瞳とかち合つた。

真っ直ぐなその眼差しが、とても綺麗だと思つた。

「あの時俺……ちゃんとお礼言えてなかつたツスから。しかも、その、相当失礼なこと言つちやつたし……」

偉い。流すことも出来ることをわざわざ説いてくるか。

この子やつぱり、根っこはすごい素直なんだな……

私が一言も発しないことに少し居心地悪くなつたのか頭を搔きながら俯く彼に、私は自然と笑みを浮かべた。

「あのピアス」

「え?」

「きつとルイ君の大切なものなんでしょ？ 窓口に問い合わせてるときもすごい必死だつたし」

「あ、や、まあ……」

「なら、本当によかつた。ルイ君の手元にちゃんと戻すことが出来て」

そう言つ私を、ルイ君は少し驚いたように見つめる。

あの時は勝手な勘違いをしてくれた少年に、メラメラと怒りの炎が燃えたぎった氣もするけど。

無闇に話しあけてくる他人にハツ当たるくらい、大切なものだつたんだ。その証拠に

ルイ君の両耳のどこにも、ピアスの穴が開いてないもの。

「だから、それだけで十分。それに私だつて先週お世話になつちゃつたしね。おあいこ！」

「……」

「……ルイ君？」

「俺も、呼んでいい？」

突然の質問に、思わず「え？」と聞き返す私。

そんな私の肩をがつしり掴むと、ルイ君は無遠慮にズズイツと顔を寄せてきて。

驚愕のあまり息を呑んだ私を尻目に、キラッキラした瞳をした彼は再度その口を開いた。

「俺もつ、“美咲さん”って呼んでもいいっスか！？」

「……う、ええつ？」

ちよつ、待て待て待て。

その承諾を得るために、わざわざこんな至近距離まで近づく必要があつたつけ？ ん？ ああ、あつたか。

いやねえよー！

「みーたーキーさん！ 呼んじゃ駄目ッスか？」

つーかもう呼んじゃつてるよね？ いやいいんだけども。むしろ良くないのは、この今にも鼻同士がくつ付いちやいそくな

お互いの距離な訳で。

顔が見る見るうちに赤く染まっていくのが分かる。

彼氏がいたのだって高校の初期だけだし……こんなに免疫無くなつていたのか私……！！

「美咲さん？……駄目ツスか？」

「……アハ。全然、いいよ」

「やつた！！」

「その代わり」

年下の少年にうりたえている情けない自分に、ギュッと右手にこぶしを作つて。

「とつと離れりおおおおおおーー！」

会心の一撃。勇者・美咲は動悸と息切れから解放された。
……モンスター・ルイは顎下にアツパーを食らつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5144ba/>

恋物語

2012年1月14日22時46分発行